

— 広告 —



大橋 将太 (おおはし しょうた)  
金沢工業大学大学院工学研究科  
環境土木工学専攻  
博士前期課程一年  
富山県立小杉高等学校出身

## 多くの人との出会い それが今の自分の財産です。

富山県射水市では多くの地域で保存会や青年団によって獅子舞が演じられている。祭りには人づくりの場でもあり、そこで育った大橋さんは幅広い年齢層の中で鍛えられた。高校の職場体験で土木の魅力を覚えてくれたのも青年団の先輩で、金沢工大の環境土木工学科に進むきっかけとなった。

「大学では勉強も部活の柔道も遊びも全力を注ぐことを目標にしました。ただ、勉強面では単位を取るためだけに授業を受けている感じでした。そんな時に木村先生に出会ったんです。講義では構造力学の計算式をどこで使うか、実際の現場の写真を使って具体的に教えてくれました。それで土木が面白くなって、勉強の仕方が変わりましたね。座学も自分の将来に

直結することなのだ。」  
学部三年でインターンシップに参加。最初の現場が物差しになるからと、先生はトンネル工事に実績のあるゼネコンを勧めてくれた。大橋さんは、自分の目を開かせてくれた先生の研究室で研究にのめりこみ、山岳トンネル工事の仕事がしたいと思うようになる。

「授業や研究室でいくつもの工事現場を見学しましたが、土木の現場は一つとして同じものがない。とくにトンネルの場合は地質や用途によって形状や工法がぜんぜん違ってくる。それが面白い。研究テーマは『道路トンネルの内装工に用いる粘着シート工の基本特性』で、中日本高速道路ほか数社との三年間の産学共同研究です。」  
側壁部にはタイルが使用されているが、はく落が問題となっているため、安全性の観点から粘着シートに着目。しかし土木では採用実績がないので、粘着シートの

粘着力の試験法の確立を目指す。これは日本で初めての研究だ。指導する木村定雄教授の専門は、トンネル工学、建設マネジメント。学生には本気で怒る厳しい先生だが、人一倍、学生思いでもある。「ほくも泣かされた一人ですが、そのあとで『これでお前は強くなった』と。失敗から多くを学び、考えて行動するようになりました。大成建設の内定をもらった時も一番喜んでくれて。いずれ大規模な建設現場をマネジメントしたいと、この会社を受けました。」

修士論文の提出が終わっても、共同研究の最終段階が三月ごろまで続く。凍結融解を二〇〇サイクルこなす「地獄の実験」だと、楽しそうに笑っていた。大橋さんは小さいころから、最高の人間形成の道歩んできたのだと思った。

**金沢工業大学**  
石川県野々市市馬が丘五七一  
電話番号〇七六二四八一二〇〇